



■ 展覧会の絵—1 学期終業式にて—

1 学期も今日で終わりです。令和 6 年度も 3 分の 1 が終わろうとしています。4 月の始業式では、今年度の合言葉「向き合う。その先に…Face it. Beyond that…」とともに、自分自身の中に顔をのぞかせている新しい芽を自分なりの方法で少しずつ大きく育てながら自己表現して行ってほしいという話をしました。また、入学式では、自己を表現する方法を見つけたいという話をしました。皆さんが部活動や学校行事、あるいは授業等学校内外の活動において“自己表現”ができるよう、私たち教職員も「自己表現のできる環境づくり」を今年度の重点目標の一つに掲げています。改めて言いますが、自己を表現する方法は、発表したり文章を書いたりすることだけではありません。部活動においてスキルアップを図ること、作品の制作をすること、あるいは自分の趣味や特技を深めていくことも自分を表現していく方法につながります。先生方にも、日々の授業においても生徒の皆さんが“自己表現”できる機会がもてるような授業の工夫をお願いしています。1 学期が終わろうとしている今、自分なりの方法で自己表現ができているかどうか、自己表現につながる自分のストロングポイントは何だろうか、と自分自身に問いかけてみてください。



90回記念東光展 リンゴ狩り 高橋健一

先日、島根県立美術館で開催された『90 回記念 東光展』という展覧会を訪ねました。そこには 100 点を超える油絵や版画が展示されていました。入口付近で目を引いたのは、明るい色調の油絵でした。美術を担当する高橋健一先生の作品です。高橋先生は、これまでも海水浴やシャボン玉遊びなど毎回“家族愛”をテーマにした作品を数多く出展されていますが、遠くからでも高橋先生の絵とわかるほど作風が確立されているものです。鮮やかな青色が印象的ですが、聞けばこの作風に至るまでには“青の時代”の前に“黄色の時代”もあったと笑いながら話していらっしゃいました。（ちなみにこの表現は“20 世紀最大の芸術家”と言われるスペインの画家パブロ＝ピカソが試行錯誤を繰り返した時期を表す“青の時代”や“薔薇色の時代”を意識したものです。）完成までには、構図からデッサン、色付けまで数か月を要するそうですが、描き始めてからも構図を変えたりするなど多くの紆余曲折があるとのこと。その過程を経てたどり着いた作品には高橋先生の“自己表現”が凝縮されていて、高橋先生の家族への思いがしっかりと伝わってきます。

展覧会には実に様々な作風の作品が並んでいました。人物や静物、風景等題材は様々で、色使いもそれぞれ異なっています。中には写真のような写実的なものもありました。しかし近づいて観ると一筆一筆絵の具が置いてあります。その一筆一筆の思いが、少し離れて俯瞰してみたときに一枚の絵となって、見ている者に感動を与えてくれます。そこには、写真とは違ったある種のぬくもりを感じます。

皆さんの心のキャンバスにはどんな絵が描かれていますか。色使いや描き方は人それぞれで

す。一筆一筆を一日一日あるいは一瞬一瞬と置き換えて、まずは自分の心のキャンバスに思いや願いといった様々な“感情という名の絵の具”を置いてみてはいかがでしょうか。

生徒の皆さんが充実した夏休みを過ごし、2学期始業式に元気な姿を見せてくれることを願っています。

【高橋健一先生の作品（ご提供いただいたものです）】



第88回東光展 シャボン玉 会員賞 高橋健一



第89回東光展 遊 上野の森美術館賞 高橋健一



第8回日展(2021) 夏の日 高橋健一



第8回日展(2021) 夏の日 高橋健一